1　富士の巻狩・夜討曽我・十番切　三冊

紙本着色　桃山～江戸時代初期（十六～十七世紀）
縦二九・五
横二三・五

この三題の物語は、曽我十郎祐成（すけなり）と五郎時致（ときむね）の兄弟が、十八年間の苦難の末、父の敵・工藤祐経（すけつね）を討ち果たすという『曽我物語』（十巻または十二巻）の後半クライマックスの部分で、幸若舞曲や古浄瑠璃において独立した題目で演じられた、いわゆる曽我物である。本作品はこの三題の冊子が一組となっているが、通常、幸若（舞の本）では、富士の巻狩の場面は「夜討曽我」の前半として取り込まれており、本作品のように「富士の巻狩」と独立した題目での存在は珍しい。

文学的にその文章を検討すると、舞の本の大頭系（古本の系統）のもので、文禄本に近似している。しかし、文禄本には曲節があるのに対して本作品にはそれがなく、読み物の形となっている。芸能に用いられた本が読み物として享受された形として興味深い。

絵場面は見開きか片面に描かれ、「富士の巻狩」は十三図、「夜討曽我」十図、「十番切」十五図が挿入されている。霞には金銀の箔を多用し、登場人物全ての衣紋を細かく描き入れるなどの丁寧な描写を、濃彩多色で表現している。土坡や樹木には狩野派の影響が見られるが、全体には狩野派ではない画風を示している。また紺紙の表紙は、金銀泥で秋草や梅、松を意匠化して装飾しており、題簽も同様の装飾である。これらの描写や装飾の様子は、桃山～江戸時代極初期の特色を表している。文学的にも、絵画的にもその制作がほぼ同時期であると考えられることから、その制作は文禄から慶長頃と考えて良いであろう。

各冊の物語のあらすじは次のようである。

「富士の巻狩」

源頼朝が行った富士の裾野での巻狩で、曽我十郎祐成と五郎時致の兄弟は、父の敵・工藤祐経を狙ったが、祐成の馬が伏木に乗り上げて射損じてしまう。これを知った畠山重忠と和田義盛は夜討ちせよと仮屋で兄弟を励ます。十郎は御家人の屋形の配置を家々の紋幕を見て探っているうちに、工藤祐経の嫡子・犬坊に見つけられて、屋形に呼び入れられる。

「夜討曽我」

工藤祐経は、同席している王藤内の面前で、兄弟の父・河津祐重は伊豆赤沢山の鹿狩の時の相撲の遺恨によって、自分ではなく、兄の大庭が討ったとも、弟の又野が討ったとも聞いていると話した。屋形に戻った十郎は、五郎に各屋形の配置を語る。兄弟は曽我の里へ遺書を認め、従者の鬼王丸・道三郎に託して里に帰す。兄弟は祐経を討たんと屋形へ急ぐが、危険を察知した祐経は屋形を替えていた。しかし本田親経と虎の妹の導きで祐経の居所に着き、忍び入る。兄弟は名乗りをあげて祐経を斬って仇討を遂げる。

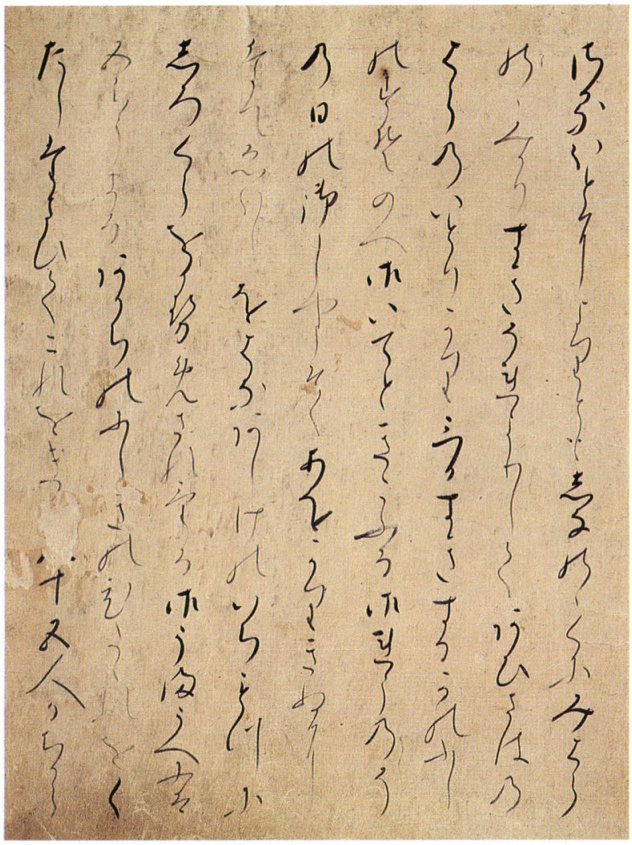
「十番切」

兄弟の夜討の騒ぎを知って、大楽の平馬丞ら九人の武士が名乗りをあげて手向かったが、兄弟は片端からこれを討った。しかし十番目の新田忠綱に十郎が討たれる。五郎は頼朝の御座所へ向い、近くで女装した五郎丸に捕らえられる。頼朝は五郎を訊問し、臆せず答える五郎に感服する。祐経の嫡子・犬坊が五郎の面を打つが、五郎は顔を上げて打たせた。そして斬罪との上意に、五郎は抵抗することなく首の座に着く。和田義盛らの助命に応じた頼朝は五郎に本領安堵状を下すが、兄十郎がいない今はそれも無益と辞退し、斬られる。頼朝は富士の裾野に社を建てて、兄弟を祀った。

「富士の巻狩」　表紙

「夜討曽我」　表紙

「十番切」　表紙



「富士の巻狩」 詞冒頭

富士野の巻狩「富士の巻狩」

曽我兄弟、工藤祐経を討つ「夜討曽我」

曽我兄弟と従者・鬼王丸と道三郎との別れ「夜討曽我」

兄弟の名乗りに、討ちに出た者と戦う「十番切」

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

近世絵巻の興起－〈物語り〉絵の諸相
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 16
編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　大塚巧藝社
翻訳　鶴岡厚生
発行　宮内庁
平成九年七月五日発行
© 1997, Museum of the Imperial Collections